

詩人——平和を告げ知らせるもの

A・パドマナーバン
前川健一 訳

このシンポジウムに参加でき、私は大きな喜びを感じています。四つの機関の共催によるこのシンポジウムは、たいへん重要なテーマを掲げています。それは、「世界平和と調和と人間主義の詩」です。熟慮を重ねてこのテーマを選ばれた関係者の皆様に、祝福の言葉を述べたいと思います。詩人たちの中には、喜び以外の何ものでもありません。私は、現在まで六年間、世界詩歌協会副会長として仕事をさせていただきましたが、その間、様々な国にいる、それぞれの言語に練達した詩人たちと出会い、交流を重ねさせていた

できました。私たちがとりわけ喜びとするのは、卓越した詩人であるクリシュナ・スリニバス博士をはじめとする高名な皆様、わけでも卓越した思想研究者である川田洋一博士を団長とする日本からの皆様が、この会場にいらつしやることです。一九九五年の八月八日、池田大作博士に「世界桂冠詩人」の称号を授与させていただきましたが、この時、私は光栄にもチェンナイに川田博士ならびに創価学会青年部訪印団の皆様をお迎えしました。何年か前、東京でこの折の方々に会い、意見を交換したのも、楽しい思い出です。

ここには、タミル・ナードゥの高名な詩人の皆さまにもお集りいただきました。ベルンカヴィコ・セトゥラマン氏は卓越した詩人であり、世界をめぐり様々な詩人の会に参加されています。池田博士は、世界的な詩人として、多くの民衆に愛読されています。我々はこちらに、博士に対し「世界民衆詩人」の称号を授与し、その榮譽を讃えるものです。私は、自らの詩集『詩人と平和』を二人の詩人に捧げました。その一人は、世界詩壇の静かなる巨人クリシュナ・スリニバス博士であり、もう一人は、平和の世界詩人・池田大作博士であります。詩人の皆様に対する歓迎の意をこめ、私の詩「平和」を捧げたいと思います。

詩人よ、平和を告げ知らせるものよ

平和を支えるものよ

平和の鎧に身をかためた

東西の騎士たちよ

ようこそ、あなた自身の国へ

哲人と見者のこの国へ

ティルムールとティルバルバルの国
ブツダとガンディーの国

ようこそ、あなた自身の国へ

ようこそ、平和へ

そして、武器よさらば！

五千年前、メソポタミア文明の時代には、人類最古の文学がありました。それから現代まで、私たちは世界中で目撃してきました。平和・真理・自由・正義を求めて絶え間ない闘争を続ける詩人・作家、哲人・見者、思想的指導者のすがたをです。

詩人には何の障壁もありません。彼らは障壁を飛び越えてしまいます。彼らの声は普遍的な呼びかけの声なのです。詩は散文に先行すると言われています。静寂のなかで想起された感情、ここに詩の根源があります。これは書いてもいいが、あれはダメだ、とか、こういう書き方はいいが、あんなふうではダメだ、とか、

詩人を規制することはできません。つまり、詩人や詩人に命令することはできないのです。詩人とは、特別な生物です。それは経験と感情、内的な振動と直感とを束ね、韻文として爆発させるのです。

真の詩人であれば、自らの経験と感情を露わにせずにはいられません。プラトンは言いました、「詩人は軽い翼を持った聖なる生き物だ。何かにとりつかれなければ、彼らは詩が書けない」。人間の中には詩人が住みついています、それは「何かにとりつかれた」人がいるということです。詩人としての生命は人間の生命とともに続いていきますが、その道のりは曲がりくねったものです。よく言われるように、詩人の方が結局のところ人間より長生きするのです。詩人は何かにとりつかれ、自らの内奥の思念・感覚・感情を吐き出しては、それに詩という衣装をまとわせるのです。こんなふうに言う人たちもいます。人間の中に宿る詩人は、その人にとって無くてはならない慰めや満足感を与える、しかもそれは、ただの人間としての人間には、どんなことをしても、与えることのできないものなのだ、

と。人類が存続する限り、詩人と詩とは存在するものようです。

他の芸術同様、詩には表現と伝達という二つの要素があります。詩には、高貴なもの・不滅のものが全て含まれています。今日の世界では、詩人たちは様々な主題について書きます。彼らが歌うのは、主の讚美であつたり、動植物から受ける感動や自然の美しさであつたりします。しかし、それだけではありません。人間の弱さや過ち、虐げられた者の苦しみ、社会の病弊なども、彼らが書くものです。詩人が改革者の重責を担うことはできないかもしれませんが、にもかかわらず彼らには責任があります。社会に現に存在していることや自分が感じたり観たりしていることを表現しなければならぬのです。マザー・テレサはナヴィン・チャウラにあてた手紙の中で、執筆活動について次のように述べています。「何をするにせよ、何を書くにせよ、神の栄光と万人の善のためだけにそれを行いなさい」

インドでは、ヴェーダやその他の聖典・叙事詩など

が韻文で書かれています。アールワールやナーヤンマール⁽¹⁾は神を讃える聖なる歌を残しました。聖ティルバル⁽²⁾、カリダーサ⁽³⁾、トゥルシーダー⁽⁴⁾ス、カンバン⁽⁵⁾等などの詩人は詩の領域で不滅の作品を生み出しました。スブラマンヤ・バーラテイ⁽⁶⁾、バーラティダーサン⁽⁷⁾、ヴァットラトル⁽⁸⁾、ラビンドラナート・タゴール、サロージニー・ナーイドウ⁽⁹⁾、オーロピンド⁽¹⁰⁾等などは詩によって彼らの最良の作品を著しています。我々がクリシュナ・スリニバス博士はパルナツソスの丘⁽¹¹⁾で卓越した詩を捧げつづけています。日本の池田博士は、感動的な詩によって慈愛・平和・友愛のメッセージを世界に広げています。私は博士と書簡でも意見を交わしました。クリシュナ・スリニバス博士、私、そして池田博士は、詩を通じて平和をもたらしという共通の活動に携わっています。池田博士は、東洋哲学研究所をはじめ様々な機関を設立されましたが、博士とこれら諸機関が、世界平和・価値創造・能力開発のために行っている実践は、賞賛に値するものであり、高く評価されています。

インドは永年にわたり複数の宗教が共存する国であり、調和・寛容・友愛を説いてきました。中世インドで広がったスーフィズムも、政教分離のメッセージを伝えました。政教分離は、インド精神にとって不可欠の要素です。「全てはダルマ（法）から生まれた」とは、インド的な政教分離を支える信条です。我が国の聖者や賢者はみなこのことを説いています。偉大な成就者であるティルムラールは、『ティルマンディラール』の中で、こう述べています。「人類は一つであり、神も一つである」。『ティルックラル』の中で聖ティルバルバルは、次のように言います。「全ての人は平等に生まれる。にもかかわらず、違いが生まれるのは、それぞれが携わる仕事で、どう振舞うかによってだけである」。ゴータマ・ブッダのダルマのメッセージはアショーク大王によって広められました。アクバル大帝⁽¹²⁾は、仏教・イスラーム・ヒンドゥー教・ジャイナ教・キリスト教・ゾロアスター教の最良のものを合わせた融合的な信仰を主張しました。両者に共通するのは、普遍的な友愛と共存を強調したことです。彼らの政治の中には、国

家の宗教的中立性という理念が貫徹しています。

カビール⁽¹³⁾とグル・ナーナク⁽¹⁴⁾は、一致・友愛・慈愛を説きました。ラーマリンガ・スワミガル⁽¹⁵⁾は、共感同苦・普遍的友愛・全ての生類への慈悲というメッセージを広めました。聖ナーラーヤナ・ゲル⁽¹⁶⁾は「全ては一つであり、差異は存在しない」と述べています。ラビンドラナート・タゴールは言いました。「多様性の中に統一があるべきだ。統一は画一とは違い、異なった人々だからこそ一つになるべきなのだ」。彼は、多様な要素から成るインドのすがたを、様々な文化が流れ込む河として描いています。全ての宗教、ならびに異なる信仰を持つ全ての人々は、平等かつ自由な市民として、居住の権利があり、社会・国家のために活動する権利があります。

或る宗教や信仰を持つ人の生殺与奪などというのは、問題になりません。世界にとって今日唱えられるべき聖句は「生きよ、そして生かせ」でなければなりません。この目標にむけて、人々の心は浄化されるべきでしょう。「精神的なスラムは、物質的なスラム以上に危

険である」ということです。不寛容・原理主義・テロリズムその他同類のものが精神的なスラムから生まれます。詩人と作家による教育やその他の支援活動が、この浄化作業のために必要とされているのです。

ラダクリシュナン博士⁽¹⁷⁾は書いています。「真の宗教的生活は愛の中に顕現すべきであり、人類の一致団結を目標とすべきである」。彼によれば、世界的一致団結という目標は不殺生によって達成されるべきものであり、それこそがヒンドゥー教・仏教・ジャイナ教・キリスト教・イスラムその他によって主張されていることなのです。

人間性とヒューマニズムとは手にとって進んで行きます。人間性 (humanity) は人間 (human) と一致・統一 (unity) から成ります。人類の核はヒューマニズムにあります。ヒューマニズムは調和への通路です。個人における調和が社会・国・世界における調和へと通じていきます。人間・個人の心は重要なものです。心こそが人々を結びつけます。心こそが人々を自由にします。心が制御され浄化されたならば、調和が保証さ

れ、それは平和に貢献することでしょう。スワミ・ヴィヴェーカーナンダ⁽¹⁸⁾は次のように言っています。

「現世において純潔な状態を獲得するには、どうすればよいのか。森の中の洞窟に行くべきだろうか。それが何の役に立つのだろうか。心が制御されていなければ、洞窟に住んだとしても何の意味もない。というのは、心が変わらなければ、そこでも平穏がかき乱されるからだ。洞窟の中にも二十人の悪魔がいることだろう。全ての悪魔は心の中にいるからだ。心が制御されていれば、どこにしようとも、そこに洞窟を見つめることができる。」

我々自身の心の姿勢こそが、我々が見る世界のありかたを決定している。我々の思考が物事を美しくする。我々の思考が物事を醜くする。全世界は心の中にある。物事を正しく見ることを学ばねばならない」

詩人は自己の自分を尽くし、人類の心を清らかで明るいものにし、邪悪な力との結合を断ち切るようにしなければなりません。彼らはまた、正義に反することや不平等・抑圧・暴力が存在しているなら、それらが

どこにあるとも、どのような形態をとつていようとも、それを暴かねばなりません。社会や国家の中で、このような刺激が作用するなら、社会全体の雰囲気や調和と平和に貢献するものとなるでしょう。社会における平等と正義とは、人類の行動を導くべき主要原則です。ダルマ（法）は道徳的強靱さと社会正義に基づいています。

巨大な困難に直面し苦痛に満ちた世界、そこでは悲嘆が積み重なり、艱難辛苦が増大し、虐げられた人々が悲惨な生活をしています。ラビンドラナート・タゴールの中に宿る詩人を苦しめたのは、このような世界でした。彼は「いま、われに帰れ」⁽¹⁹⁾の中で、詩人たちに虐げられた人々のための活動を支持するよう訴えかけます。

神は彼から顔を背けた

誰も彼を助けようとはしない

口では虚勢を張つても

劣等感にさいなまれる

詩人よ、立ち上がれ。君が心を持つているなら

それをひっさげて、今日の日の贈り物とするのだ

悲嘆は積み重なり、苦痛は激しい

苦難の世界が行く手に見える

赤貧、空虚、狭小、閉鎖、暗黒

食べ物を私たちは求める、私たちは生命を探しも

とめる

光を私たちは必要とする、私たちは自由な空気を

渴望する

私たちが切望するのは強さだ、私たちが熱望する

のは健康だ

そして楽しく、まばゆいばかりの一生だ

胸は勇気でふくらむ

この欠乏のただ中で

詩人よ

いま一度、天上界さながらの信仰をもたらすのだ

私は、一九九一年、ボンベイの『バヴァンズ・ジャ

ーナル』に書きました。「現在は、平和そのものを強め、

全世界の平和運動を強化すべき時である。現在は、平

和の鐘を鳴らし、世界の隅々にまで音色を鳴り響かせ

るべき、危急存亡の秋である。それは現に活動してい

る平和であり、生きている平和である。墓場の平和で

もなく、真空の中の平和でもない。平和は、人類の文

化と文明が結実したものであり、それこそが全世界の

男女を『人間』とし『人間的』にするのである。ダイ

ナミックな姿勢こそが、人類を成長させ進歩させるの

である」。私たち全員は、この目標に達するために、更

なる気概と献身の姿勢で、頑張つてまいりましょう。

シンポジウムと詩人の会の無事成功をお祈りしてい
ます。

注

(1) ヒンドゥー教はヴィシュヌ信仰とシヴァ信仰に大別さ
れるが、南インドで活躍したシヴァ派の詩人たちをナ
ーヤンマール(六〜十一世紀)、ヴィシュヌ派の詩人
たちをアールワール(七〜一〇世紀)と呼ぶ。彼らの
作品は聖典として、それぞれの派で尊崇されている。

(2) タミル語の箴言詩集『ティルックラル』の作者(五世
紀)。「ティルックラル」は聖典扱いされ、尊敬をこめ

て聖ティルバルバルと称される。

- (3) インド古典美文学最大の詩人(四〜五世紀)。叙情詩集『雲の使い』や詩劇『シャクンタラー姫』が有名。

- (4) 叙事詩『ラーマヤナ』に基づき主人公ラーマ王子への信仰を鼓吹する『ラーム・チャリット・ナーマス』の作者(一五三二〜一六二三)。ラーマ王子はヴィシュヌ神の化身とされるが、ラーマ信仰の普及に『ラーム・チャリット・ナーマス』が与えた影響は甚大であり、今日でも聖典として尊崇されている。

- (5) 『ラーマヤナ』をタミル語で翻案した『イラーマヴァダーラム』の作者(九〜一二世紀。諸説あり)。タミル語圏では「詩人の皇帝」と称される。

- (6) タミルの近代文学を確立した詩人(一八八二〜一九二一)。愛国主義的な作品を残す。

- (7) タミル語の詩人。バラタイの思想を継承し、社会主義的な作品を著す。

- (8) ケララ地方のマラーラム語の詩人(一八七九〜一九五八)。民衆的な作品で、広く愛唱されている。

- (9) 近代インドの詩人(一八七九〜一九四九)。ガンディーに賛同し、女性として初めて国民会議の議長を務めた。

- (10) 一般にオーロピンド・ゴシユと呼ばれる(一八七二〜一九五〇)。近代インドを代表する思想家の一人で、国民会議派の過激派として活動した後、南インドに隠棲し、ヨーガの実修にもとづいて、伝統的なインド思

想を新たに体系化した。

- (11) 詩の女神ムーサ(ミューズ)が住むとされるギリシアの丘。

- (12) ムガル帝国第三代皇帝(在位一五五六〜一六〇五)。ムガル帝国の支配権を確立するとともに、諸宗教の比較研究をする「神の家」を設立したり、新宗教「神の宗教」を唱えるなど、諸教融合的な思潮を広めた。

- (13) インドの宗教改革者(二四四〇〜一五一八頃)。ラーマ信仰を基調に、ヒンドゥー教改革・諸宗教の融和を説いた。ヒンドゥー教・イスラーム・シク教から等しく尊崇されている。

- (14) シク教の開祖(二四六九〜一五三九)。カビールの影響を受け、バクティにもとづく神の崇拜を説いた。「グル(師匠)」と呼ばれる。

- (15) タミルの文学者・宗教者(一八二三〜七四)。伝統的なシヴァ賛歌の中に現代的な主題を盛った作品を著すとともに、宗派性を廃し慈善事業を含む宗教活動を行った。

- (16) 南インドの不可触民出身の宗教改革者(一八五四〜一九二八)。カースト制度を批判し、下層民の社会的・宗教的救済を行った。

- (17) 南インド出身の哲学者・政治家(一八八八〜一九七七)。オックスフォード大学教授・ペナレス大学学長等を歴任。独立後、駐ソ大使・副大統領を経て、大統領に選任された。

(18) 近代インドの宗教者（一八六三～一九〇二）。インド

伝統哲学の宗教経験を民衆に分かりやすく説いたラーマクリシュナ（一八三六～八六）の弟子で、ラーマクリシュナ・ミッシェンを設立して、師の教えを世界に広めた。

(19) 詩集『絵のような女』所収。森本達雄「タゴールと十九世紀ベンガルの民族覚醒」（『タゴール著作集』別巻「タゴール研究」、一九九三年、第三文明社）に抄訳がある。本稿ではパドマナーバン氏が引用した英文にもとづき翻訳した。

※訳注にあたっては、田中於菟彌・坂田貞二『インドの文学』（一九七八年、ピタカ）、早島鏡正他『インド思想史』（一九八二年、東京大学出版会）などを参考にした。

（A・パドマナーバン／メガラヤ州元知事・

世界詩歌協会副会長）

（まえがわ・けんいち／東洋哲学研究所研究員）